

韓国（朝鮮半島）の「もぐらの婚姻」

——日本の「鼠の嫁入り」との比較——

邊 恩 田

1 はじめに「鼠かもぐらか？」

日本に「鼠の嫁入り」という昔話がある。そのおよその筋は次のようである。

鼠の親が、大切に育てた美しい娘にこの世で一番のお婿さんを求めて、一番偉い（または強い）と思った太陽を訪ねて行った。しかし、太陽は自分をおおい隠す雲が偉いというので雲を訪ねると、雲は自分を吹き飛ばす風が偉いという。そこで風を訪ねると風は自分より壁が偉いという。壁を訪ねると、自分をかじり穴をあける鼠が偉いというのを聞いた鼠の親は、自分たちと同じ鼠の若者を婿にした。

この話は、インド古代の教訓説話集『パンチャタントラ』の第4巻第9話「地に堕ちた白衣」のなかにその本源が認められるとされ、

韓国（朝鮮半島）の「もぐらの婚姻」

八世紀半ばにはアラビア語の説話集『カリラとデイムナ』の「少女に変身した二十日ねずみ」に、そして一六七八年頃にはフランスのラ・フォンテーヌ作『寓話』の一篇「娘に変わったハツカネズミ」に、その伝播・伝承が確認できる。世界的な分布をもつ民間説話である。

アールネ／トムソンのATでは、2031 [Stronger and Strongest]とし、のちのウッターのATUでは、2031C [The Mightiest Being as Husband for the Daughter]（娘の婿としての最も偉大な存在）と分類している。

このように「鼠の嫁入り」は、娘のために、強い・偉大な・立派な結婚相手を探そうとする話であり、最終的に「婿」にしたのは、ほかでもなく同類の鼠であったとかたる話と言える。

日本においてこの話は、どう名付けられ分類されてきたかを見る

と、『日本昔話名集』（一九四八）には、「土鼠の智取（鼠とも）」とあって、土鼠（もぐら）としつつも、鼠が登場する話もあると注記している。また『日本昔話集成 第三部』（一九五七）と『日本昔話大成 8』（一九七九年）では、「土童の嫁入」とするタイプ名に「土童（もぐら）を挙げてゐる。そして『日本昔話通観』（一九七七―一九八九年）では、「鼠の婿選び」という話型を示し、「もぐら」ではなく「鼠」を挙げてゐる。

登場する主人公は「もぐら」なのか「鼠」なのか、気にかかる問題である。というのも、韓国においてこの話は、

「두더지의 혼인」(もぐらの婚姻)^①

という話型名で分類されているからである。しかも、あとで見ると、^①「もぐら」ではなく「鼠」とする資料も少なからずあり、このことは、世界における伝承との関わり、とりわけ日本と朝鮮半島をめぐる関係性や伝播の問題を示唆し、興味深い。

こうした問題を念頭に、本稿では、韓国（朝鮮半島）における文献（書承）と口承の資料を整理し新資料も含めて紹介し、さらに日本の「鼠の嫁入り」の特徴を確認しながら比較考察を進めていく。

2 「婿」になってほしいと訪ねて行った相手は誰か？

話の「主人公」とともに注目したいのは、娘の「婿」にしようと

訪ねて行った相手は誰か、という点である。次から次へと訪ねて行った相手は、先掲の三資料では次のようであった。

『パンチャタントラ』^② … 太陽（神）↓雲↓風↓山

『カリラとティムナ』^③ … 太陽↓雲↓風↓山

『寓話』 … 太陽↓雲↓風↓山

まず「太陽」を訪ねている点、次に「雲」を、さらに「風」を訪ねて行き、最後に訪ねたのが「山」である点、三資料ともまったく同じであった。これが、揺るぎない伝承としてあったことが知られる。

では、朝鮮半島の「もぐらの婚姻」ではどうであろうか。訪ねて行くのが誰々なのか、とりわけ、最後は誰かに着目したいが、結論をここで先に言えば、それは「弥勒仏」（「恩津弥勒」、単に「弥勒」「石仏」とも）であった。

世界の伝承に比し、この「弥勒仏」というのはきわめて特異である。その意味するところ、伝承の背景などを明らかにしていきたい。

3 日本語による紹介と翻訳

朝鮮におけるこの話が、日本人によって紹介されたのは、一九二二年（明治四五）がもつとも早いようである。

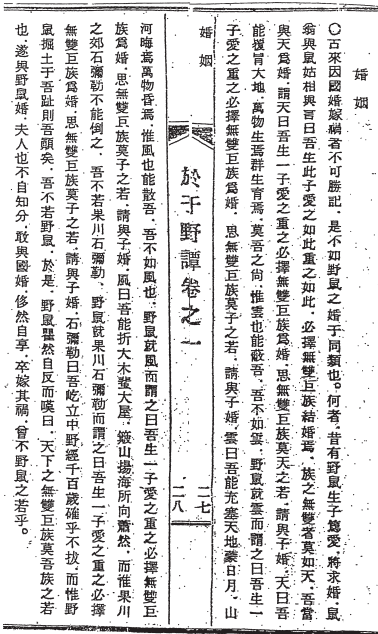
青柳綱太郎編輯の『朝鮮野談集』^⑤に載る「野鼠天下の巨族に婚を

求む」と題した一篇がそれである。古典文学の柳夢寅著「於于野譚」の当該原文を、日本の漢文訓読法によつて読み下したものである。

原漢文(図1参照)には基づいた訓読文ではあるが、抄訳がかなり見うけられた。たとえば、原文の冒頭(適宜句読点を付した。以下同)、

古來、因國婚嫁禍者不可勝記。是不如野鼠之婚于同類也。何者は、すべて省いてしまい、そこに青柳自身の作による

図1 萬宗齋本『於于野譚』(李忠九監修・朴明姬他訳注、伝統文化研究会、二〇〇一より)



凡て婚姻の道、之を望む太だ濫なれば、必ず成るの理無しという文を入れている。さらに、原文末尾にある柳夢寅自身の評文、夫人也不自知分、敢與國婚、侈然自享、卒嫁其禍、曾不野鼠若乎。

についても、青柳自身の評文、

亦た以て世間求婚者の鑑戒と爲す可し

に取り換えている。また、原文中に四度出ている繰り返し表現、訪ねて行った天、雲、風、弥勒仏に婚を請う発言の、

吾生一子、愛之重之。必擇無雙巨族爲婚

も省いているが、その際、「其故を告げ」や「前言の如くして」「又た」などの表現でつないでいる。すなわち、青柳は、作品を味読し

評価し、自らの判断で作品に手を加えて紹介したということになる。

八年後の一九二〇年、山崎日城の『朝鮮の奇談と伝説』に「鼠の婚禮」母國譯其儘」という紹介があった。このサブタイトル「母

國譯そのまま」というのは、日本と対比して感じた山崎自身の感想

を付記したものと思われ、同様に訳文の書き出しのところにも「此

の話も内地の話になつてゐる……」という一文を入れているが、こ

こに、朝鮮から日本(当時「内地」と称していた)への「伝播」を

想定した山崎の理解がうかがえる。

その後一九三二年には、中里龍雄による「朝鮮民譚 もぐらの嫁

探し^⑦」が「俚俗と民譚」誌に掲載された。

原漢文の内容にもとづきながら、文語体のなかに昔話の語り口調をまじえた、こなれた文体になっていて読みやすい。上記した四度の繰り返し文も、すべて省くことなく訳出している。ただ、原文の「果川石弥勒」を、川邊りの石彌勒としたのは誤訳で果川は地名である。（これについては後述）

ところで、訳文が終わったところに、中里は、自身が知る日本の昔話と対比しての印象を、次のように書き加えている。

亦この話は、私の幼い頃、どこかで聞いたことがあり、この本には、野鼠とあるが、土龍と太陽であったし、石彌勒といふのは、石地藏であった。どちらでも同じ譯だが、いま文献を調べる餘裕がない。どなたか、御報導下されば、大へん悦ばしく思ふ。

これを見ると、中里が鋭い比較の視点を持っていたことがわかる。

一九八〇年になって、洪沢青花による翻訳『朝鮮民話集』^⑧（四〇話）に「野鼠の婿えらび」というタイトルで収められた。「野鼠」の語には「もぐら」とルビが振られている。本文は現代日本語で親しみやすい文体と言える。ただ先に指摘した繰り返し文のところは、省略や端折るという処理をしている。

語りにおける繰り返し表現というのは、文字ではなく、く

見えるが、耳で聞くと生き生きとした語り口とリズムを感じさせる重要な機能を持つ表現であり、この点やや惜しまれるが、四〇話の朝鮮民話が広く読まれるのに寄与したと評価されよう。

4 『於于野譚』

さて、以上で取りあげてきた紹介・翻訳は、すべて朝鮮王朝中期の文人柳夢寅（一五五九―一六二三）の筆記文学『於于野譚』（「於于」は号）収録される一篇にもとづいたものであった。

『於于野譚』は、朝鮮王朝時代文学のなかでは「筆記文学」というジャンルに置かれ、のちに大きく盛行する「野談」^{ヤダム}文学の嚆矢として高く評価される作品である。

柳夢寅は王朝の高官の地位にあったが、下野した。民衆の生活と文化に親しむ暮らしのなかで、それまでに見聞きしていた事件や人物について、野史や巷談、世相のさまざまについて多くを筆記して残した。それらがまとめられたのが作品『於于野譚』である。

そこには退屈ざましの破閑的笑い、鋭い現実批判と風刺、そして実学的な教訓がうかがえると評価されている。

もともと原漢文には題目（話のタイトル）のようなものは付されていないため、韓国の現代語訳、研究論稿、そして日本語の紹介などで、それぞれにタイトルを付けたことである。前項で取り

あげたのは、この代表的な朝鮮古典文学を日本に知らせんとした成果の数々と言える。

さて作品『於于野譚』については、梅山秀幸による本格的な日本語訳本が二〇〇六年に出ている^⑨。全訳ではないものの、原作に載る膨大な数の説話や筆記文の多くが翻訳されたのは大きい成果である。その翻訳本ではタイトルを「野鼠の結婚」としている。ところで、原文冒頭の訳文は、

昔から、王室の婚姻によって禍が出来した例は枚挙に暇がない。これは野鼠が同類と結婚するのと同じようにはいかない。どういふことか。

とあるが、付線部分のところはその意味が明瞭に伝わりにくい。柳夢寅がこの話によって表そうとしたのは何であったのか。それがこの前言部分に示されているのだが、それは「国婚」（王室との結婚）によって、いわゆる「外戚」として政治権力を握ろうとする人間への批判である。

そういう人間は、はじめは結婚相手を高望みしたけれど最後は同類と結婚した野鼠もぐらに及ばない、野鼠にも劣ると厳しく断じたのが、この付線部分なのである。

実際、歴史上で外戚による政争によって禍を転嫁され犠牲となった人物は数多く、柳夢寅はそのことを見聞きし知っていた。そして

韓国（朝鮮半島）の「もぐらの婚姻」

彼自身、仁祖反正（一六二三年の政変）の際誣告による謀反の嫌疑で処刑となった人物であった。（のちこの冤罪は解かれた）

すなわちこの一篇は、柳夢寅が、その時代に伝承されていた民間説話「もぐらの婚姻」を借り、「国婚」をして他人に禍わざわいを転嫁する人間はもぐらにも劣ると揶揄する。笑いを提供した文学作品であった。

5 文献資料

この『於于野譚』のほかに、「もぐらの婚姻」に関する文献資料に『旬五志』があるという報告は、一九九六年になされていた。曹喜雄は、洪萬宗（一六四三―一七二五）著『旬五志』に本説話が見られることを指摘していた^⑩。さらに曹喜雄は、イソップ寓話にある「猫の首に鈴をつける」（ネズミの相談「Belling the Cat」）の話が、「猫項懸鈴」という漢文タイトルで『旬五志』に記載があることも明らかにしたので、漢文学である『旬五志』は、民間説話研究においても非常に重要な文献と注目されるようになった。

ついで金南馨は、さらに新資料として高尙顔コサン（一五五三―一六二三）著『效颦雜記』を紹介した^⑪。その後、黄仁徳による比較研究が出て以降、「もぐらの婚姻」に関する研究が続いた^⑫。

以上述べたように、現在のところ文献資料に次の三点がある。

①「題目なし」

…天↓雲↓風↓果川の石弥勒

柳夢寅『於于野譚』(一六二一〜一六二二年筆下)

②「題目なし」

…日↓月↓雲↓風↓石仏

高尙顔『效噺雜記』(一六一八〜一六二二年間)

③「鼯鼠婚」または「鼠婚」

…天↓日月↓雲↓風↓石仏

洪萬宗『旬五志』(一六七八年)

①および②の原漢文には、話のタイトルは示されていない。①は「人倫」篇の「婚姻」項に置かれ(但しこれは後人によるもの)、②は「鼯鼠婚姻」という四字熟語(ことわざ)の意味を説く一文となっている。

ところで、②の著者高尙顔も官職にあったが、時の乱政(光海君代)に下野し、郷里に隠居し学問と著述に専念したという。①の柳夢寅ともども、同時代を生きた二人の儒者・文人の筆記に民間話話の「もぐらの婚姻」譚が書きとどめられたのは驚くべきと言える。むしろ固有語の表現が漢文化されたものではあるが、彼らが残した筆記作品から、民間の文学、口承文学に関する情報をもうかがい知ることができるのは、まことに貴重なことと言える。

特に②の資料から得られること、すなわち一六二二年当代の時点で四字熟語として定着していたとわかるのであるから、よって「もぐらの婚姻」譚も相当古くからあったであろうと推測できる。

さて、③の『旬五志』は、その自序に、病臥の折にそれまでに聞いていたさまざまな話や俗談などを一五日間(旬五)で記述し置いたものと記している。写本によって享受されたため写本が多く伝存するが、筆者が調査したところ、伝本によって二種のタイトル「鼯鼠婚」と「鼠婚」が確認できた。これは留意されるべきで、すなわちこの事実は、③成立の一七世紀後半ころに、主人公を「もぐら」と「鼠」とする二種類の伝承が併存していたことを示すものと判断してよい。

著者の洪萬宗は幼少より病弱であったため、士大夫として官僚の道には進まなかつたようで、長生術を求めるなかで「道教や神仙術に心酔した」人物とされている。本文に「日月」を登場させて、「天」を訪ねた「もぐら」に、「私の徳は、日月がいなければ顯されるができないのだ(非日月則無以顯吾徳)と天に言わしめて

いる内容は、彼のそうした哲学と関わるものかと思われる。

6 口承資料

さて次に、これまでに筆者が入手した口承資料を次に提示する。タイトルと出典を示す。(原文を筆者訳によって示す。②⑥は日本語訳がありそれによった。⑦⑩は韓国精神文化研究院一九八〇)

八二年刊)

① 「もぐらの婿」『任哲宰全集8』平民社、一九九一(採録一九三二年)

② 「ネズミの花婿」鄭寅燮『温突夜話』三弥井書店、一九八三(採録一九四五年)

③ 「鼠の婚姻」李周洪『韓国風流笑譚』成文閣、一九六二

④ 「もぐらの婿」『任哲宰全集10』平民社、一九九三(採録一九七〇年)

⑤ 「鼠の婿候補」任哲宰編『イエンナルイヤギ選集 わが国篇Ⅲ』教学社、一九七一

⑥ 「ネズミの婿選び」任東權編／熊谷治編訳『韓国の民話』雄山閣、一九九五(原書は一九七二年刊)

⑦ 「もぐらの新郎選び」『韓国口碑文学大系8・1 慶尚南道』

⑧ 「鼠ともぐらの婚事」^{姉妹み}『韓国口碑文学大系7・4 慶尚北道』

⑨ 「もぐらの婚姻」『韓国口碑文学大系8・6 慶尚南道』

⑩ 「鼠の婚姻」『韓国口碑文学大系1・7 京畿道』

⑪ 「鼠の配匹はもぐら」^{結婚相手}『韓国口碑文学大系6・2 全羅南道』

⑫ 「鼠の求婚」キムジョンソル編『平壤の伝説』朝鮮口伝文学資料

集・社会科学出版社、朝鮮民主主義人民共和国・平壤、一九九〇
文献資料三点とこれら口承資料二点について、内容を精査し対

韓国(朝鮮半島)の「もぐらの婚姻」

表 韓国(朝鮮半島)の「もぐらの婚姻」文献・口承資料対比表

資料	タイトル	主人公	子ども	訪ねる相手・その順序
文献	① (なし)	もぐら 野鼠	子	天→雲→風→果川の石弥勒
	② (なし)	もぐら もぐら 鼯鼠, 鼯	^(むすめ) 女	日→月→雲→風→石仏
	③ 鼯鼠婚, 鼠婚	もぐら 鼯鼠	^(こども) 雛	天→日月→雲→風→石仏
口承	① もぐらの婿	もぐら	娘	太陽→雲→風→恩津弥勒
	② ネズミの花婿	鼠	娘	太陽→雲→風→恩津の弥勒石仏
	③ 鼠の婚姻	鼠	息子	太陽→雲→風→果川の石弥勒仏
	④ もぐらの婿	もぐら	娘	太陽→雲→風→恩津弥勒
	⑤ 鼠の婿候補	鼠	娘	太陽→雲→風→恩津弥勒
	⑥ ネズミの婿選び	鼠	娘	太陽→雲→風→恩津弥勒
	⑦ もぐらの新郎選び	もぐら	娘	太陽→雲→風→恩津弥勒
	⑧ 鼠ともぐらの婚事	鼠	(語らない)	玉皇→雲→風→弥勒(→もぐらと結婚)
	⑨ もぐらの婚姻	もぐら	(語らない)	太陽→雲→風→恩津弥勒
	⑩ 鼠の婚姻	鼠	娘	太陽→雲→風→壁
	⑪ 鼠の配匹はもぐら	鼠	娘	太陽→雲→風→弥勒(→もぐらと結婚)
	⑫ 鼠の求婚	鼠	息子	月→雲→風→ ^{モランボン} 牡丹峰

比表を作成した。

この表から得られた重要な特徴について、次にまとめた。

1 主人公は、文献資料の①②③ではすべて「もぐら」^⑩である。しかし文献③は、本文では主人公を「もぐら」（漢字の「鼯鼠」「鼯」とするにもかかわらず、そのタイトルには「鼯鼠婚」「鼠婚」の二種が見られた。これは齟齬とも混乱（筆写者の誤写）とも言えるが、「もぐら」と「鼠」の伝承の存在をうかがわせた。

一方、口承資料においても、⑧⑪では、主人公は「鼠」であるのに、最後に結婚した相手は「もぐら」になっていて、ここにも「もぐら」と「鼠」の混在が見られた。この⑧⑪を含めると「もぐら」は六話になり、文献と口承一五話中の九話を占める多さとなる。

すなわち、韓国（朝鮮半島）の「もぐらの婚姻」は、インドなどの古伝承における「鼠」を保持しつつ、「もぐら」の伝承を強く併せ持っているということである。そのことが判明した。

管見の限り、他民族他国の伝承に確認できない「もぐら」は、韓国（朝鮮半島）の特徴と判じてよい。おそらく「鼠」の伝承が先行し、のち「もぐら」の伝承が生まれたであろうと推測する。その根拠が「恩津弥勒」、「弥勒」である。それはなぜか、2で述べる。

図2 恩津弥勒ウンジンミル（正式名「灌燭寺石造弥勒菩薩立像」
〔韓国民族文化大百科事典〕



2 主人公が最後に訪ねたのは、⑩の壁、⑫の山を除き、すべて弥勒である。表に見るように「恩津弥勒」「弥勒」「石仏」などの呼称で登場する。

弥勒信仰は、三国時代より盛んで高麗時代（九一八〜一三九二年）に大きく盛行した。多くの弥勒菩薩像が全土に置かれ信仰を集めたが、なかでも忠清南道恩津ウンジンにある「恩津弥勒」^⑬は、その高さ一八・二メートルにもなる巨大な石仏であり、「ウンジンミルク」と民衆から親しみをもって呼ばれた。（図2写真参照）

「風」が「もぐら」に言う。いくら強く吹いても倒せない「恩津弥勒」が自分よりもっと偉いと。しかしその巨大で重い弥勒石仏を倒すことができるのは、足もとの土を掘りトンネルを掘り進んで土台を崩してしまふ「もぐら」であった。これは「鼠」にはできないワザである。だからこそ恩津弥勒はもぐらに、「もぐらは私より力が強く立派だから、私よりも力が強くて立派な婿になるので、もぐらに婿になってくれと言つてごらん。」(口承①)とほめて、もぐらたちの価値を悟らせたのである。

こうして「恩津弥勒」と「もぐら」がそろつてこの話に登場し、より説得力ある、笑い、を提供したと筆者は推測する。弥勒石仏こそは、「もぐら」とともに最も重要な韓国(朝鮮半島)の特徴なのである。

ところで「恩津弥勒」ではなく「果川石弥勒」とするのが文献①である。これは京畿道果川^{クワチョン}にある弥勒石像のことで、果川は、①の著者柳夢寅が隠居していた道峯山^{トボクサン}から南方にある地である。

すなわち柳夢寅は、身近によく知る「果川弥勒」を、「恩津弥勒」の代わりに登場させたと理解できよう。現実に即した柳夢寅の改作と見てよいだろう。

3 訪ねて行った最後が「山」であるのは、⑫の一話のみである。

「山」は、インドからヨーロッパの古伝承に見られたことは最初

韓国(朝鮮半島)の「もぐらの婚姻」

に指摘していたが、唯一口承資料⑫が、それを保持していた。しかし、⑫のそれは、単なる一般名詞の「山」ではなかった。平壤の名勝として名高い「牡丹峰^{モダンボク}」という山であった。⑫の採録地が平壤^{ピョンヤン}であることからすれば、平壤にある名山の登場は、まさしく朝鮮的な改変と評価できる。

7 日本の「鼠の嫁入り」

——「もぐら」と「地蔵」の視点から——

さて、これまで韓国(朝鮮半島)の「もぐらの婚姻」資料を提示し、伝承の様相を見てきたが、ここで日本の「鼠の嫁入り」を取りあげ、比較の視点から考察を進めたい。着眼点は「もぐら」「最後に訪ねた候補者」である。

まず、文献資料については、先行研究と筆者調査によって次の三資料を確認した。

①「貧窮追タル事」…日天子^{ヒツテン}↓雲↓風↓築地

無住「沙石集」(二二八三年成立) 巻第七・拾遺六九

②「一休ねずミはなしの事」…日天子↓雲↓風↓築地

一休宗純「二休諸国物語」(二六七二年頃刊) 巻二第十五

③「鼠為女擇配」…天上ノ日↓雲↓風↓墻

岡白駒「奇談一笑」(一八九七) 第十二話

三資料とも、「鼠」が主人公である。そして最後に訪ねたのは「築地」や「塙」であるとする。①の『沙石集』は本話の初出文献になり、その成立は二二八三年とされるので、二三世紀後半には、すでに日本の伝承世界にあったことがわかる。

①の無住（二二一六―一三二二）と②の一休宗純（一三九四―一四八一）、ともに僧侶がこの話の伝承に深く関わっていたことが確認できる。①は教訓的傾向が強いが、②は、教訓的な話よりも若干の風刺と笑いを込めた滑稽ばなしの側面があるようである。江戸中後期には「笑話」として享受されたようである。③の岡白駒（一六九二―一七六七）は漢学者であって、中国白話小説の翻訳なども行った人物であり、『奇談一笑』には漢文訓読体で収まっていることから、中国の何らかの作品や資料から紹介した可能性が大きいのではないかと思われる。「塙」という語がその根拠で、この語が中国の類話に多く見られるからである。これらの文献についてはさらなる研究が必要である。

以上、日本の文献資料に、「もぐら」は見られないことを確認しておく。「もぐら」は次に見る口承資料に多く登場している。

*

日本の口承資料については、立石展大氏の詳細な報告「日中「鼠の嫁入り」の比較研究」がある。全国各地のこれまでの採録話を収

集・整理し、その内容を項目別に対比した「調査話一覧」表を示し、さらに中国における類話を翻訳紹介し日中の比較考察を進めている。その一覧表には「鼠の嫁入り」として五二話が表示された。そしてこの五二話以外に「循環形式の話」として一一話が挙がっているが、筆者は「鼠の嫁入り」は結婚譚と認定する立場でありここでは循環型は除く。

まず、この五二話について、その後新たに加わる資料六話が確認できたので、ここで報告したい。次のA〜Fである。タイトル、訪ねて行く相手と順序（原文のまま）、出典、採録地を示す。

A 「もぐらもちの嫁さん」・天道様↓雲↓風の神↓地藏様

（『昔話研究』第二巻一号、一九三六・五。新潟県見附市今町）

B 「鼠の嫁入り」 .. お天道様↓雲↓風↓壁

（國學院大學民俗文化研究会編『伝承文芸』第三号、一九六

五・三。新潟県岩船郡）

C 「ねずみの嫁入り」 .. お日いさん↓雲↓風↓壁

（國學院大學民俗文化研究会編『伝承文芸』第九号、一九七

二・六。福井県勝山市）

D 「ねずみの智選び」 .. お日様↓雲↓風↓壁

（野村純一「老鼠娶親」の道」『昔話伝説研究』13号、一九八

七・七。愛知県北設楽郡津具村）

E 「いなばの白ねずみ」 … 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土壁

(廣田収責任編集『桜井小菊昔話記録集』私家版、二〇二二)

長野県下伊那郡清内路村)

F 「鼠の嫁取り」 … おてんとさま ↓ お月さま ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 壁

(大島建彦「阿武隈山地の昔話(二)」『昔話研究と資料』41号、

二〇一三・三。福島県郡山市中田町駒板)

以上の六話を加えて、日本の「鼠の嫁入り」口承資料は、五八話となつた。

*

この五八話について、まず主人公に注目し原文にあたり調べたところ、「もぐら」が主人公である一六話が確認できた。五八話中の一六話という多さは注目すべきである。

この一六話の、原題・採録地・訪ねて行った相手と順序について①～⑬に示す。

- ① 「もぐらもずの婿さがし」宮城県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 地蔵
- ② 「モグラモズの婿探す」宮城県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 地蔵
- ③ 「モグラの嫁入り」山形県… 太陽 ↓ 空 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 山
- ④ 「土龍の嫁入り」福島県… 太陽 ↓ 空 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土手
- ⑤ 「土竜嫁入」福島県… 太陽 ↓ 月 ↓ 風 ↓ 壁 ↓ 地蔵
- ⑥ 「もつくらもち」新潟県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 岩山

韓国(朝鮮半島)の「もぐらの婚姻」

⑦ 「もつくれもちの嫁」新潟県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 山

⑧ 「土龍の嫁さん」新潟県… 太陽 ↓ 空 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土堤

⑨ 「土龍の嫁入」新潟県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土手

⑩ 「もぐらもちの嫁さん」新潟県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風の神 ↓ 地蔵

⑪ 「もくろの智取り」鳥取県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 山

⑫ 「もぐらの智さがし」岡山県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 壁 ↓ 土台

⑬ 「(原題不詳)」岡山県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土塀

⑭ 「もぐらの嫁さん」広島県… 太陽 ↓ 空 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 土

⑮ 「白いもぐらの子」福岡県… 太陽 ↓ 雲 ↓ 風 ↓ 大地

⑯ 「もぐらの智取り」大分県… 太陽 ↓ 黒雲 ↓ 風 ↓ 練塀

*

この一六話について、次に注目したいのは最後に訪ねたのは誰かである。驚くことに「地蔵」とするものが四話あつた。①、②、⑤、⑩である。一六話中の四話、25%を占める多さである。実のところ筆者は、「地蔵」という語に目を見張った。「もぐら」が「仏像を訪ねていたからである。しかもその仏像が「もぐらにはかなわない、もぐらもつと偉い」と言うからである。たとえば例を挙げると、次のようにもぐらに言うのである。

「俺がなんぼええばつても、もぐらもずさんには土を掘つたであらでひくりげえつてしまつたら、もぐらもずさんにはとつても

かなわねえがす。俺よりももぐらもずの方がずつと偉えと思ひす。」①の資料。地蔵のことは）

「俺がなんぼえはばつても、……モグラモズさんぬは、とつてもかなえん。俺よりも、モグラモズさんの方が、ずつとえれエド思えす（思います）」②の資料。地蔵のことは）

このように「もぐら」と「地蔵」（仏像）がセットで登場するモチーフと展開は、これまで見てきた韓国（朝鮮半島）の「もぐらの婚姻」とまったく同じと言え、強い伝承の関係を認めることができる。朝鮮半島からの伝播によるものとしてよいであろう。

むしろ「伝播」という問題は難しくその特定は容易とはいえない。この問題を論じる際には、同じ「漢字文化圏」というくりからして、特に朝鮮半島と日本の比較において、中国を除外しての議論は成果が望みにくいとされ、筆者もそれには同意するものである。

しかしながら「鼠の嫁入り」の場合、これまで紹介があった中国民間話、昔話の翻訳等には見あたらず、立石訳の中国類話^⑧においても「もぐら」や仏像の類はまったく見られないことから、この特徴が中国に発するとは考えにくい。

伝播の時期やルートなどを具体的に特定することは、ことに口承文学の場合非常に困難であるが、一つの大きな手がかりが「恩津弥勒」にある。この石像が高麗時代初期九六八年の造成であることか

ら推測すれば、それ以降に、おそらくかなり経った時期に日本に伝わったという推測が可能となる。

日本において「地蔵」は、古くからの広く篤い地蔵信仰のもと、六地藏や地藏堂など日本全土に数多く存在し、「お地藏さん」と親しまれる身近な仏像であることをふまえるなら、「弥勒」が「地蔵」へと変わっていったのは、日本の信仰・文化にそった変容であったと理解される。

注

- ① 「婚姻」という漢字語は、朝鮮語においては、日本でいう「結婚」の意味で用いられていることから、ルビを付した。
- ② 田中於菟弥・植村勝彦訳『アジアの民話12』大日本絵画、一九八〇。
- ③ 菊池淑子訳『カーラとデIMUMナ』平凡社・東洋文庫、一九七八。
- ④ 今野一雄訳／ラ・フォンテーヌ『寓話（下）』岩波文庫・岩波書店、一九七二。
- ⑤ 青柳綱太郎『朝鮮野談集』朝鮮研究会、一九二二。
- ⑥ 山崎日城『朝鮮の奇談と伝説』ウツボヤ書籍店、一九二〇。
- ⑦ 中里龍雄『俚俗と民譚』一卷五号、一九三二年六月。
- ⑧ 渋谷青花『朝鮮民話集』社会思想社、一九八〇。
- ⑨ 梅山秀幸『於于野譚』作品社、二〇〇六。続は二〇一九年刊。
- ⑩ 申翼澈・李亨大・趙隆熙・盧英美共訳『於于野譚』（韓国学中央研究院・トルベケ、二〇〇六）の「解題」によれば、写本・版本等の異本約三〇本を蒐集し調査した結果、従来の主テキストである萬宗齋本（五二

一話)にはない三八話を新たに発掘した結果、『於于野譚』収録の説話数は五五九になったという。

⑪ 青喜雄『韓国説話の類型』増補改正版・新潮閣、一九九六、三三頁。

⑫ 金南馨「泰村高尚顔の『效囀雜記』について」『漢文教育研究』第10号、一九九六。なお二〇〇七年に同氏訳注『效囀雜記』(啓明大学校出版部)が出ている。

⑬ 黄仁徳「もぐらの婚姻」説話の印・中・韓比較考察『語文研究』第48号、二〇〇五・八。琴榮辰「東アジアにおける「鼠の嫁入り」の享受」『日語日文学研究』第79輯、二〇一一。琴榮辰「句五志」に見える東アジアの共通説話——「桃太郎」・「鼠の嫁入り」の類話新資料をめぐって——『説話文学研究』第47号、二〇一一。金均泰「鼠(もぐら)婚姻譚の叙事的意味と文学治療の活用」『文学治療』第28輯、二〇一一・三一。

⑭ 『泰村集』卷之四(『韓国文集叢刊59』一九九一)

⑮ 『洪萬宗全集』上巻、大学社、一九九七。

⑯ 注⑮の解題「洪萬宗の著述」、九頁。

⑰ 大会発表時、文献①の原文「野鼠」はもぐらなのかという質問があった。漢字の意味だけを辞典に見て「のねずみ」と理解しがらだが、同じ漢字であっても中国・朝鮮・日本の文化による意味の相違が発生すると考える。意味・用法が三国に同じとは限らない。まして「무리치」(もぐら)は固有語であるため、漢字に置きかえる際、漢字語の「鼯鼠」をあてたのが文献②、「鼯」をあてたのが文献③で、①は「野鼠」の語をあてた、と判断する。難しい漢字語「鼯鼠」「鼯」より民間になじむ「野鼠」を柳夢寅は選んだのではなからうか。また①の原文には「野鼠掘土于吾趾」とある。土を掘る行為は、鼠よりもぐらが理にかなう。鼠なら、かじる。もしくは、穴をあける。であろう。韓国におけるこれ

までの『於于野譚』訳注本・現代語訳本・研究論文等において「野鼠」を「のねずみ」とする事例は一点のみであった。以上の根拠から筆者は「野鼠」に従う。

⑱ 「恩津弥勒」は忠清道論山郡恩津面(現在の忠清南道論山市)所在内最大の弥勒像であり、高麗時代初期九六八年造成の記録がある。恩津弥勒に関する説話は非常に多く伝わる。小林純子氏は『韓国口碑文学大系』弥勒説話の類型(『日韓比較文学研究会二〇一三年大会での発表』)において三〇話の口承資料を提示した。

⑲ 石仏について、注⑬の琴榮辰論稿(後者二七頁)は「よりによってなぜ石の「仏」なのかという疑問は依然として残る。」とし、恩津弥勒や弥勒石仏への言及がない。

⑳ 松村武雄「鼠の嫁入り」説話研究(『東洋学芸雑誌』三二巻四〇六号、一九一五・七)が文献③を、南方熊楠「鼠の嫁入り」の晰について(『東洋学芸雑誌』三三巻四〇七号、一九一五・八)が文献①を指摘した。

㉑ 渡辺綱也校注『沙石集』日本古典文学大系85 岩波書店、一九六六。

㉒ 武藤禎夫・岡雅彦編『断本大系 第三巻』東京堂出版、一九七六。

㉓ 『奇談一笑』赤志忠雅堂、一八九七。(国立国会図書館デジタルコレクションによる)

㉔ 立石展大「日中「鼠の嫁入り」の比較研究」『説話・伝承学』第7号、一九九九。四。「日中民間説話の比較研究」(汲古書院、二〇一三) 収載。注②の立石氏「調査話一覽」の21番の原文は「鼠」であるので除外。

①～⑬の出典は次のとおり。①大内金光「ふるさとの民話」一迫町公民館、一九七三(『日本昔話通観』4)。②佐々木徳夫編「むがすむがすあつたごぬ」日本の民話13、未来社、一九六九。③佐藤義則「羽前最上小

国郷のトント昔コ』一九六六。④小島一男『会津昔話抄』一九七四（通観7）。⑤山本明『鬼の子小綱―福島 of 昔話』桜楓社、一九七四。⑥松代高等学校校文芸部『くびきの民話』一九六七（通観10）。⑦水沢謙一『とんと一つあったてんがな』日本の民話5、未來社、一九五七。⑧文野白駒『加無波良夜譚』玄久社、一九三二。⑨野村純一『増補改訂 吹谷松兵衛昔話集』一九七五。⑩『昔話研究』第二卷一号、一九三六・五。⑪稲田浩二・福田晃『昔話研究資料叢書4 大南北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇。⑫稲田浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』三弥井書店、一九七三。⑬仙田実・山内靖子『和氣稿』41号、一九七六（通観19）。⑭垣内稔『安芸・備後の民話第二集』日本の民話23、未來社、一九五九。⑮福岡県教育委員会『全国昔話資料集成11』岩崎美術社、一九七五。⑯宮崎一枝『昔話研究資料叢書2 国東半島の昔話』三弥井書店、一九六九。なお原文の、おてんとさま・天道・日輪・日は「太陽」とした。

⑳ 注㉑の論稿、87頁。

〔付記〕 本稿は、二〇一九年度日本昔話学会大会（七月七日）において発表した「朝鮮半島の「もぐらの婚姻」（鼠の嫁入り）」——文献と口承資料——の一部を増補しまとめたものである。